



富岡製糸場概要

富岡製糸場は、2014年に世界遺産に登録されたことにより、注目度が増した。皆さまも名前は聞いたことがあるという方も多いのではないだろうか。しかし、なぜ富岡製糸場が世界遺産なのか、そもそも何をしている場所なのかわからないという方も意外と多いのではないかと思うので、この特集を読んでもらう前の予備知識として、富岡製糸場の概要を紹介していく。

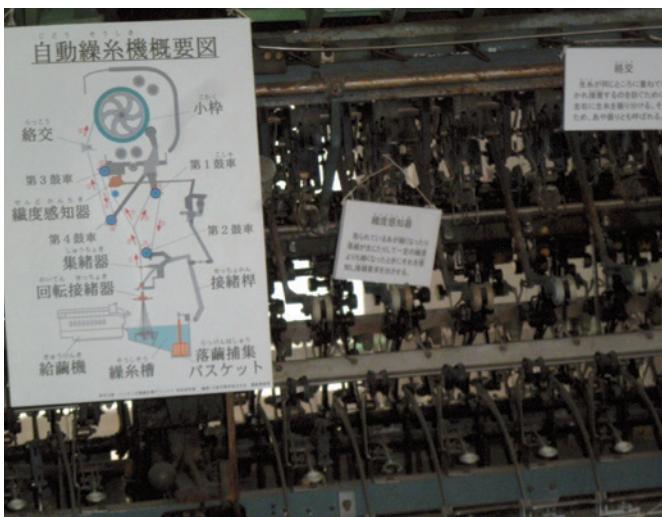
富岡製糸場は江戸時代が終わり、文明開化の明治時代に日本が近代国家となるために作られた日本初の機械式製糸工場である。製糸すなわち蚕の繭から糸を作るという作業をするための工場なので、明治五年（1872年）に作られた糸場であるが、なぜ富岡という土地が選ばれたのであろうか。1、もともと養蚕が盛んで蚕を多く確保できる。2、工場を作ることができる広大な土地がある。3、周辺住民の同意を得ることができる。4、養蚕に必要なきれいな水を確保できる。5、工場を動かすために必要な石炭を近くから得ることができる。

などの条件が当てはまつことにより、富岡に工場が作られることとなつた。

当時の富岡製糸場

富岡製糸場が操業を開始したのは今（2015年）から143年前の1872年、明治5年のことであり、300人もの工女がはたらいていた當時で世界一の製糸工場であった。富岡製糸場などの近代的な工場が作られる前は、女性が農業の合間に糸をとつたり、少ない人数の工場で「座縄器」と言われる道具を人力や水力を用いて生糸を生産していた。しかし、江戸の後半頃生糸の主な生産国であるフランスやイタリアで蚕の病気である微粒子病が流行り生糸の生産が殆どできなくなっている。又、中国（当時の清）ではアヘン戦争や太平天国の乱のため国が混乱し生糸の生産量が大きく減っていた。そこで日本の優れた生糸が大量に求められるようになり、明治政府の役人であつた大隈重信・伊藤博文・渡沢栄一などが工場の建設を計画して建てられたのが富岡製糸場である。

生糸の質を向上させるためには細かく繊細な作業が求められたため富岡製糸場で工女が学ぶ必要があつた。そこで明治政府は全国から工女の募集をかけたのだがはじめは誰も集まらずにいた。集まらなかつた理由が当時ならではのフランス人に対するイメージを表しているので紹介する。赤ワインを飲むフランス人を見た日本人は「工女になつたら生き血を吸われ大変なことになる」と勘違い



したため工女が集まらなかつたという。困つた初代場長の尾高惇忠は長女の「勇」14歳を工女第1号として入場させると、安心して続々と工女が集まるようになり明治6年までには404人の工女が集まつた。

工女も集まり順調に工場が稼働し続け稼働から翌年の明治6年にはウイーン（オーストリア）万国博覧会に出品した結果、質の良さが認められ第2等になり富岡シルクの名を高めるまでに至つた。

シルクロード

養蚕業により群馬県、長野県、埼玉県は成長を遂げていつたが生糸による恩恵を受けたのはこの三県だけではない。生糸を世界に輸出するためのシルクロードとして幕末の開港後から国際港湾都

市となつた横浜へと生糸を運搬する国内シルクロードによる発展も見られる。この国内シルクロードというのが現在の高崎線、東海道線であり鉄道が整備されていないときは中山道（画像1参照）が用いられていた。又、富岡製糸場での繭の需要は大きく群馬県だけではこれを満たすことができなかつたため各地から原料繭の輸送として用いられたのが八高線であつたとされている。

八王子はもともと甲州街道（画像2参照）の宿場町だつたが幕末の開港以後各地から運ばれる繭や生糸の一大ターミナルと化した。繭や生糸は八王子から横浜までの街道・神奈川往還を馬を使つて運ばれていた。そのため寒村だった八王子は中継地点として発展していくことになる、さらに「横浜鉄道」（現在の横浜線）が敷設され、また更に昭和9年（1934）には八王子—高崎間に八高線が開通し八王子は「桑都」と呼ばれるまでに発展していくた。



画像1



画像2